



キャビンアテンダントから転身。

食の激戦地、中国・広州で支持される

カフェレストランのオーナー

香港に近いグローバル都市・広州は、外食市場が成長を続ける中国の中でも、各国の料理店がひしめきあう飲食業の大激戦地です。そんな広州で、地元の方々はもとより、観光客からも人気を博するカフェレストランが「リア・カフェ」。オーナー経営者である松山里絵さんは、甲南大学法学部を卒業後、エバー航空・上海航空のキャビンアテンダントを経て中国に根を下ろし、起業したチャレンジ精神あふれる女性です。そのバイタリテイの源泉はどこにあるのでしょうか。「甲南での4年間がなければ、今の私もない」と松山さんは言いきります。

リア・カフェ オーナー

まつやま りえ
松山 里絵 さん

2006年、法学部を卒業後、エバー航空・上海航空でキャビンアテンダントとして勤務。その後、中国・広州に移住し、2013年に現地でレストラン「リア・カフェ(Lia Café Bar Restaurant 中国語名:松山珈琲屋)」をオープン。地元の大人気店となる。現在、英語・中国語に加えてフランス語もマスターするべくレッスン中。



” 多彩なおいしさも SNS 映える美しさで勝負

” You should definitely go (絶対行くべき)。(「性价比高(コスパがいい)」。中国の飲食店クチコミサイト「大衆点评」には、「リア・カフェ」を絶賛する声が並ぶ。メニューは洋食やエスニック料理、さらにスイーツまで多彩。日本式のラーメンとともに看板メニューとなっているワッフルは、映える飾り付けで若い女性の心もつかんでいる。

店内は1階から4階まで200席以上あり、抱えるスタッフは約50名。松山さんは毎日、厨房やホールに指示を出し忙しく立ち働いている。店内のオペレーションだけでなく、新メニューの検討や売上管理、ソフト調整といったマネジメントもこなす。

” 「実は、私の両親は複数の飲食店を経営しているんです。だから開業する前に、しばらく実家で修業しました。それから、広州で知り合った華僑の女性からもアドバイスをいただいています。この方は、近くで人気のベトナム料理レストランを経営している成功者。私の開業資金も投資してくださりました。」

” 実家が飲食店経営、現地にビジネスパートナーがいるというアドバンテージがあるにせ

よ、中国人でさえ店をつぶしやすいうち広州で日本人が成功するのは並大抵のことではない。ましてや、松山さんは経営を本格的に学んだことがなく、出身は法学部だ。なぜ、中国で経営の道に突き進んだのだろうか。

” 大学時代の留学経験から 海外で働く自分が見えてきた

” 「大学で法学部に進んだのは、法律に興味があったわけじゃない。とにかく、高校まで一度も勉強したことがない分野に挑戦してみたくて」。そんなことはもちろん、生まれながらに「チャレンジの芽」をもっていたことがうかがえる。その芽をさらに伸ばしたのは、在学中の留学経験だった。

” 「小学校から私立に通っていて、周りに帰国子女が多かったです。自然と海外に憧れ、大学ではイギリスへの短期留学と、1年間の長期留学を経験しました。」

” 長期留学ではリーズ大学の東アジア学部で学び、多国籍な学生たちと机を並べた。そこで松山さんは2つの衝撃を受ける。「一つは、ほとんどの学生が中国語を専攻していたこと。日本ではとにかく英語!だったのに、もう世界では中国語なんだ、と。もう一つは、人から



本格的なディナーメニューからティータイムのスイーツまで幅広いメニューを取りそろえる。テイクアウトにも対応。

地元中国の方々だけではなく、リア・カフェは世界中のゲストから支持されている。



” の質問が『英語を話せる?』『中国語を話せる?』ではなく『何か国語を話せる?』だったこと。グローバルに活躍するには、この質問に答えられるようにならなきゃいけない。そう強く感じました。」

” 大きな気づきを得た松山さんにとって、1年間の留学はあまりにも短すぎた。「もつと語学力を磨きたい」「働きながら自分を高めたい」という思いが募り、大学卒業後は日本の企業ではなく、台湾のエバー航空でキャビンアテンダントになる道を選ぶ。在学中、日本航空のインターンシップに参加し、香港の空港でグラウンドスタッフとして働いたことも糧になったという。海外での経験を積み重ねることと、「世界を舞台に働く」ことに何らハードルを感じなくなっていたのだ。

” 出会いをチャンスに変えて 気づけば開業から7年

” エバー航空に勤めたあと、松山さんは上海航空に移り、さらにキャビンアテンダントの経験を積んだ。仕事ばかりではなく、恋もした。ロシア人の男性だった。ある意味、運命の出会いと言えりかもしれない。「その彼が『中国人の友人と広州で起業する』と言うので、ついていくことにしたんです」。しかし松山さんは、ただ恋人に寄りかかっている女性ではない。自分の足で立とうとする。なんと広州に着いた翌日、現地で日本語フリーペーパーを発行している会社に面接に行き、すぐに広告営業として採用が決まった。そして、いちばん最初に営業に行ったレストランの経営者が、現在のビジネスパートナーである華僑の女性だった、というわけだ。

” 「飲食店をやろうと思ったのは、広州で自分

” の居場所をつくりたいと思ったからです。でも、最初の2年間は、レシピを考えて、作って、お客さんが来て対応して...で、精一杯でしたね。食材をアウトに量ったり、店の酒を勝手に飲んだりする中国人従業員の扱いにもずいぶん悩まされたとか。「最近、やつと利益を生む」ことが楽しいと思えるようになってきました」と笑う松山さん。「リア・カフェ」はこの夏、2013年7月の開業から7周年を迎えた。

” アジア2号店、日本でビジネス...、 チャレンジは終わらない

” 今年のコロナ禍で、中国の飲食店も大打撃を受ける中、松山さんは甲南大学に1,000枚のマスクを寄贈。そこには、今も忘れられない母校への思いがあった。「甲南は、個性を尊重する自由な気風から、向上心の高い学生、挑戦する学生が多かったように思います。そして先生方も背中を押してください。自分のやりたいことをとことん追いかけるという姿勢は、間違いなく甲南で身についたものです。だからこそ、私は今も海外でがんばっているんだなって」。

” 松山さんの次なる目標は、中国の店を發展させつつ、アジアの別の国にも出店すること。「フィリピンやベトナムがいいかな、と考えています。若い人が多くて、広州から飛行機だと2時間で移動できますし。あとは、今までの経験を生かして、日本でも何かビジネスをやりたいですね。これは飲食店かどうかともわかない、まだ漠然とした夢ですけど」。

” 「チャレンジの芽」は、世界を覆う感染症とまでへし折れそうにない。そして、まだまだ伸びていく、もっともっと大きな花を咲かせようとして。